

町長

ひとりごと

65

斉藤

譲



わが家のすぐ近くに小さな野菜畑があって、その一角には路が群生している。春まだ浅い頃、ここに顔を出す路のとうに春の訪れを覚え、その青い香りとほろ苦さに春の味覚を味わうのが、私の秘かな楽しみの一つであり、それはまた田舎に住む幸福を実感するときでもある。この路が大きく葉を広げる頃になると、その葉柄を摘んで塩辛く煮ると結構な箸休になる。

実はこれを作るのは専ら母の仕事で、自分でもその味付けにはいささか自信を持っているのか、たまに余所の人から味がいいとお褒めをいただくことがある。それが嬉しくてかどうかは知らないが、結構まめにこの路の煮付を作っている。

ある日、母はいつものように摘んだ路を抱えて畑から帰ってきた。そして窓の外から、何かを踏みつけてしまったと興奮して話すのであるが、はじめのうちは何を言っているのかわからなかった。よく聞いてみると、路畑の中で卵を抱いていた雉子を、知らないで踏みつけてしまったというのである。足もとから鳥が立つ聲ではないが、母はびっくり仰天してしまったようであるが、踏まれた雉子のほうもさぞかし驚いたことであろう。巣には九個の卵が残されていたということである。よりによって腰曲りの年寄りに踏まれるとは、何ともだらしのない奴だとい瞬思ったが、よく考えてみると迫りくる足音に怯えながらも、最後のギリギリまで卵を守ろうとしたこの雌鳥の健気な勇氣と態度には胸を強く打たれた。こ

の雌鳥はそばの山の中に逃げこんで、悲しく哀れな声で鳴き続けていたという。▼母もたいへんショックで

きじ さいなん 雉子の災難



あつたらしく、可哀想なことをしてしまったと、反省と気づかいをくりかえしていた。偶然の出来事だから仕方がないと、家族皆も母を慰めたが、それにしてもこの雉子にとっては災難なことであり、申し訳なかつた。何とかいま一度帰ってきて、無事に雛に孵してほしいものだと思つた。願っているのであるが、その後卵

を抱いている気配も無心配をしている。

このことをある人に話したところ、一度卵に人間の臭いが付いたら、親鳥は絶対にその卵は抱かなくなるかと教えてくれた。また、卵を抱いた鳥は、雉子に限らずどんな鳥でも決して簡単には逃げたりしないよう、事実町内でも卵を抱いたカ

に巣を作るとは思つてもいなかった。これは雉子の習性なのか、またこの区域が休猟区に指定されていることが原因なのかは私には分からない。この休猟区も、

聞くところによると今年の猟期からは解禁になるという。解禁を心待ちしているハンターや農作物を荒される農家の皆さんには申し訳ないことであるが、私は心情的にはこの休猟期間が延長されれば、更に出来ることなら禁猟区になればいいと思つている。鳥や動物たちと共存できる世界の実現こそ、私達人間が追い求めなければならぬ永遠のテーマではないだろうか。

▼こんな出来事があつてから暫くして、ある本を読んでいたところ、次のようなことわざが出てきた。

焼野の雉子夜の鶴

この意味は、およそこういうことである。

きじの親は、巢のある野原が焼けると、身の危険を顧みず、子を助けようとし、鶴の親は、自分の翼で夜の寒さから子を守る。子を思う親の情を表

わしたことばである。

またしても、先日あの雉子の雌鳥のことが思い出された。私はこの一羽の鳥に、私達人間がいま失いかけている何か大切なことを教えられたような気がした。

野に生きる動物や鳥たちは、常に与えられた環境の中で生かされるままに生き、その環境に自ら手を加えることは決してない。それをするのは総て人間であり、それによって動物や鳥たちの住処はますます狭められ、住みにくくされている。しかし、悲しいかな彼らはこれに抵抗したり、主張したりする術を持たない。こんな哀れな鳥たちでさえ、親子の絆はわが身を賭してまで守ろうとする。

それに引換え、万物の霊長だと嘯く人間さまの生き様は、果たしてどうであろうか。

胸が締めつけられるのが、私一人ではあるまい。